

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：14501

研究種目：科学研究費補助金（若手研究（B））

研究期間：平成 21～平成 24 年度

課題番号：21720320

研究課題名（和文）モロッコにおける「先住民」運動の成立と展開をめぐる歴史人類学的研究

研究課題名（英文）Historical Anthropology on Emergence and Development of an Indigenous Movement in Morocco

研究代表者 齋藤 剛 (SAITO, Tsuyoshi)

神戸大学大学院・国際文化科学研究科・准教授

研究者番号：90508912

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、北アフリカにおける先住民運動の一つと目されるアマズィグ運動について、とくにモロッコを対象地域として、その成立と展開や活動実態、運動が抱える問題、一般住民の社会・宗教生活との離接関係を、現地調査および植民地支配期以降の文書資料をもとに、人類学的観点から明らかにしようとするものである。その多様な活動の実態については、とくに王立アマズィグ学院における標準アマズィグ語策定や、運動における歴史観、故郷観、宗教観を例として明らかにした。一般住民の社会・宗教生活との関係性については、モロッコ南部出身で、モロッコ有数の商業民として知られるベルベル系シュルーフを事例として、彼らの多くにとって宗教的帰属に基づくアイデンティティーが重要な意味を有していること、翻って運動からは距離を取る一因となっていることを明らかにした。そのようなムスリムとしての帰属意識が端的に現れているのが、故郷を中心舞台として展開している新たな社会運動としてのマドラサ（伝統的イスラーム教育機関）の復興である。本研究では、既存のアマズィグ運動研究ではあまり顧みられないことのない、そのようなマドラサ復興運動に目を向けることで、アマズィグ運動の動きとは異なるアイデンティティー運動の可能性を明らかにした。この他、既存の人類学的ベルベル研究の動向の整理と総括、アマズィグ運動が展開する中で再編されている地域概念、あるいは運動を駆動する民族の差異を際立たせる認識の批判的検討など、理論面でも研究を進めている。

研究成果の概要（英文）：This research project has elucidated the following points as its main contributions. (1) Historical process of the development of the Amazigh movement in Morocco (2) The role of Institut Royal de la Culture Amazighe (IRCAM) in the creation of the Amazigh language (3) Characteristics of the activists' perspectives on language, history, homeland, and religion (4) The relationship between the Amazigh movement and the socio-religious lives of the ordinary people (5) The Madrasa (traditional Islamic school) revival movement among the southern Moroccan Berbers as their new identity movement, and the possibility of it reconfiguring local society (6) Theoretical examination of previous anthropological studies on Moroccan Berbers

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：人類学、先住民、モロッコ、ベルベル、アマズィグ

1. 研究開始当初の背景

北アフリカの最西端に位置するモロッコでは、1990年代以降、「グローバル化」政策

の後押しを受けつつ、従来「ベルベル人」の名で知られてきた人々の間で、エリート主導の下、アマズィグ運動という名で知られる「先住民」運動が活発化している。

その流れを受けて開始されたアマズィグ運動研究は、それまでの研究蓄積の少なさに比べるならば、この数年で急速に拡大へと向かう兆しを見せてはいるものの、全体としてみれば、まだ端緒についたばかりといえる状況にある。加えてその多くは、アマズィグ運動の政治的な局面に注目をする一方で、運動とは関係の切れた一般のベルベル人の社会宗教生活におけるアマズィグ運動の位置づけは不問にふされたままである。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような既存の研究で等閑に付された論点の探究を通じて、モロッコという特殊な社会的・歴史的な文脈におけるアマズィグ運動の受容と普及のプロセスを、多角的に明らかにすることを目的としている。この目的を遂行するための主要な論点として、以下の諸点を挙げるができる。

(1) 先住民運動としてのアマズィグ運動の成立とその歴史的展開の解明

(2) 活動の現状の解明

(3) 運動を支える基盤となるべき一般住民の社会生活と運動との関係のあり方の解明

(4) アマズィグ運動とは異なる形で生起しつつある、故郷支援を志向する運動との比較を通じたアマズィグ運動の可能性と限界の検証

3. 研究の方法

研究は、現地調査と文献資料収集調査による一次・二次資料の収集の実施と、それらの分析を通じて実施した。

現地調査は、モロッコ王国の南西部スース地方、およびスース地方出身者の主要な出稼ぎ先であるラバト市、カサブランカ市、並びにフランス・パリ市などにおいて実施をした。とくに王立アマズィグ学院、ラバト市、カサブランカ市などに拠点を有するアソシエーションの人々へのインタビューや聞き取り調査、アマズィグ語教育に携わっている教員への聞き取り調査、スース地方の伝統的イスラーム教育関係者への聞き取り調査の実施のほか、一般住民の生活への参与観察、自由会話方式に基づく調査などを行っている。文献資料収集は、主に、ラバト市にある国立図書館、ムハンマドV世大学附属図書館、私

設図書館、パリ市にあるアラブ世界研究所などにおいて実施した。

4. 研究成果

本研究は、先行研究が等閑に付していた上記の問題の乗り越えを目指し、モロッコにおけるアマズィグ運動の現状と実態を多角的に検討すべく、以下の4項目を主要な研究課題として掲げた。

(1) 先住民運動としてのアマズィグ運動の成立とその歴史的展開の解明

(2) 活動の現状の解明

(3) 運動を支える基盤となるべき一般住民の社会・宗教生活と運動との関係の解明

(4) アマズィグ運動とは異なる形で生起しつつある、故郷支援の動きへの着目と、それとの比較を基にしたアマズィグ運動の可能性と限界の検証

これらについて研究の遂行により一定の成果を得られたほか、理論的側面、2000年代以降に飛躍的な変貌を遂げたデジタル・メディア環境の変容などに関わる研究成果も得ている。

(1) アマズィグ運動の成立と展開：アマズィグ運動の成立と展開については、独立に際しての国家統合政策（アラビア語化、モロッコ化）や都市化、社会的周辺化を契機として運動が成立したこと、90年代以降に国家が積極的に容認をする中で、他地域の先住民や国際機関との連携によるグローバルなネットワークを流用しつつその動きを活発化させていることなどを、既存の研究を整理しつつ明らかにした。

平成22年度には、植民地支配期以降のベルベル研究とそこでの諸理論を検討に付した口頭発表「人類学的ベルベル研究の展開」を、平成23年度には口頭発表「モロッコにおけるアマズィグ運動の成立と展開」を通じて研究成果の一端を発表している。また、2011年以降にモロッコに波及した「アラブの春」との関連でアマズィグ運動の現状について、平成24年度に“Reflections on Political Change in North Africa and Its Influence on the European Union,”と題した論考を発表している。

(2) 活動の実態の解明：活動の実態については、とくに王立アマズィグ学院の言語編纂委員会委員、教員研修カリキュラム策定委員、王立アマズィグ学院研究員、アソシエーショ

ンの成員などにインタビューを実施し、既存の研究では明らかにされていない標準アマズィグ語制定に至るプロセスに関わる情報を得ている。また、王立アマズィグ学院と他のアマズィグ団体との相互関係、モロッコ初のアマズィグ団体であるモロッコ文化交流協会（AMREC）などについても、現地調査を通じて一次資料の収集を行った。

本課題については、とくに平成 22 年度に実施した口頭発表「<先住民化>という隘路を超えて—モロッコにおけるアマズィグ運動とマドラサ復興のゆくえ」において、その成果の一端を明らかにしている。

(3) アマズィグ運動とイスラーム：今日のモロッコにおけるアマズィグ運動の国家レベルでの位置づけを見定める上では、世俗主義的思潮を汲むアマズィグ運動と、それに拮抗する勢力とみなされるイスラーム主義の、ナショナルな政治的領域における相互関係を度外視することはできない。このイスラーム主義とアマズィグ運動の関係については、すでに多くの研究においても言及がなされているが、本研究では、アマズィグ運動の政治的次元における位置づけを全体的に把握する上で、第四極として近年台頭しつつあるスーフィー教団の存在も視野に収める必要があると捉え、その成果の一端を 2011 年度の口頭発表「現代モロッコにおけるスーフィー教団の展開」において提示した。

(4) 一般住民の社会・宗教生活と運動の関係：上記のような政治的次元に着目する既存の研究に対して、アマズィグ運動が一般の住民の社会・宗教生活の中でいかなる位置を占めているのかという社会的次元をめぐる問題は、これまでの研究において等閑に付されてきている。

本研究では、アマズィグ運動の一般住民の社会生活の離接関係を把握するために、第一に、アマズィグ運動が新たに形成した歴史観、故郷観、言語観、宗教観の特質の解明を、既存の研究を援用しつつ、目指した。明らかになったのは、世俗主義を選好するアマズィグ運動がイスラームとの距離を取ろうとしつつも、ムスリムとしての自己認識を強く有する一般住民の宗教意識からの乖離を避けるべく、イスラームとアマズィグ人の関係をめぐる新たな理解を提示していることである。この理解を踏まえた上で、既存の研究では触れられていない、一般住民にとっての故郷観、宗教観の特質の一端を浮き彫りにし、アマズィグ運動のそれとの異同をイスラームとの繋がりを明らかにした。

研究成果としては、一般住民の宗教観の一端を明らかにした論考「バラカ概念再考—モロッコをフィールドとした人類学的ムスリム

聖者信仰研究の批判的検討」が平成 21 年度に学術雑誌『イスラム世界』誌上に査読のうえ掲載をされているほか、平成 22 年度には学術雑誌『アジア・アフリカ言語文化研究』誌上に「聖者信仰の「本質化」を超えて—モロッコにおけるフキーの治療の事例から」と題した論文が査読を経て掲載されている。このほか、平成 24 年度には、” Toward an Understanding of the Significance of *Baraka* in Everyday Life Contexts: With Reference to Anthropological Studies on Maraboutism in Morocco” と題した論考が『上智アジア学』に、“Narrating the Life of a Man Known as a Sufi: An Anthropological Reflection on Narratives on al-Hājj ‘Alī al-Darqāwī by His Son al-Mukhtār al-Sūsī and Others” と題した論考が『イスラーム世界研究』誌上に掲載をされている。

(5) 故郷支援運動とアマズィグ運動：一般住民の社会・宗教生活と関連して、アマズィグ運動とは一線を画しつつ故郷で展開をしている異なるアイデンティティー運動の事例として、マドラサ復興運動を取り上げ、運動における故郷／都市をつなぐネットワーク形成や、運動が目指す新たな社会のあり方、故郷観などを明らかにし、アマズィグ運動の限界を乗り越える可能性をそこに見いだした。

平成 22 年度には、こうした点について、バルセロナで開催された「中東研究世界会議」

(WOCMES) で “Homelands and Home Pages: Contemporary Amazigh / Berber Identity in Southern Morocco and Beyond” と題して、パネル・セッションにおいて研究成果を発表した。欧米系の研究者の間では、近年、アマズィグ運動の研究を進める向きはある。しかし、それらの研究においてはベルベル人（アマズィグ人）の故郷で展開されているイスラーム復興運動の動きがアマズィグ運動と並行したアイデンティティー運動であることや、両者の相互関係を視野におさめた研究は、管見の限りでは、未だ存在しない。この点において、本研究は、国際的にみても独創的なものであり、北アフリカにおける先住民運動の理解を深める上でも重要な意義を有したものであるといえる。この点を受けて、国際学会において欧米系の研究者はもとよりモロッコの研究者からも高い評価を得ることができた。

(6) 以上に加えて、理論的側面については、平成 23 年度に「<非境界型世界>という視座から<地域>を再考する」および「<非境界型世界>という視座から<地域>を再考する—中東に生きる人々に学ぶ<地域>の

捉え方」という2本の口頭発表を通じて研究成果の一端を明らかにしたほか、デジタル・メディアの普及について同じく平成23年度に「通信の技術革新は中東世界をどう変えたか」と題した口頭発表を行っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①SAITO, Tsuyoshi,

“Reflections on Political Change in North Africa and Its Influence on the European Union,” EUの内と外における共生の模索(神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター 2012年度研究報告書) 神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター
査読無、2013、81-91

②SAITO, Tsuyoshi,

“Narrating the Life of a Man Known as a Sufi: An Anthropological Reflection on Narratives on al-Hājj ‘Alī al-Darqāwī by His Son al-Mukhtār al-Sūsī and Others,” Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (『イスラーム世界研究』) 京都大学イスラーム地域研究
査読無、6巻、2013、4-20

③SAITO, Tsuyoshi,

Toward an Understanding of the Significance of Baraka in Everyday Life Contexts: With Reference to Anthropological Studies on Maraboutism in Morocco
The Journal of Sophia Asian Studies (『上智アジア学』)
上智大学アジア文化研究所
査読無、30巻、2012、71-88

④齋藤 剛

聖者信仰の「本質化」を超えて—モロッコにおけるフキの治療の事例から、アジア・アフリカ言語文化研究
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
査読有、80巻、2010、61-96

⑤齋藤 剛

バラカ概念再考—モロッコをフィールドとした人類学的ムスリム聖者信仰研究の批判的検討
イスラーム世界、日本イスラーム協会

査読有、74巻、2010、1-32

⑥齋藤 剛

人生の喜びと楽しみを求めて—モロッコのベルベル人と民俗歌舞アホワーシュ、フィールドプラス
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
査読無、1巻3号、2009、20-21

[学会発表] (計11件)

①SAITO, Tsuyoshi

“Reflections on Political Change in North Africa and Its Influence on the European Union” International Workshop on “European Identity in Political, Economic and Social Changes” (Intercultural Research Center, Kobe University), 6 February 2013, Brussels (Belgium): Vrije Universiteit Brussel.

②SAITO, Tsuyoshi,

“Narrating the Life of a Man Known as a Sufi: An Anthropological Reflection on Narratives on al-ḥājj ‘Alī al-Darqāwī by His Son al-Mukhtār al-Sūsī and Others” SIAS/KIAS-CNRS Joint Seminar “Narrating the Narratives of Sufis,” 3 November 2012, Kyoto: Kyoto University

③齋藤 剛

「〈感情〉を通してみるムスリム聖者信仰—モロッコにおけるフキの診断/治療を事例として」日本感情心理学会第20回大会記念シンポジウム
2012年5月26日
神戸大学

④齋藤 剛

「モロッコにおけるアマズィグ運動の成立と展開」, 関西大学東西学術研究所研究例会「国家、民族、アイデンティティ」
2011年12月17日
関西大学東西学術研究所

⑤齋藤 剛

「〈非境界型世界〉という視座から〈地域〉を再考する—中東に生きる人々に学ぶ〈地域〉の捉え方」地域研究コンソーシアム「コンソーシアム・ウィーク」シンポジウム「地域研究のだまし絵—「グローバル化」後に「地域」への眼差しを再考する」主催: 大阪大学グローバルコラボレーションセンター (GLOCOL)

大阪大学世界言語研究センター
地域研究コンソーシアム (JCAS) 新学術領域
研究「国家の輪郭と越境」
2011年11月4日
大阪大学

⑥齋藤 剛 「通信の技術革新は中東世界をどう変えたか—モロッコの宗教と暮らしの事例から」第12回神戸大学大学院国際文化学研究科公開講座 (ひょうご講座 2011) 「ネット社会を再考する—心の問題から社会変容まで」
2011年10月22日
神戸大学

⑦齋藤 剛
「現代モロッコにおけるスーフィー教団の展開」神戸大学大学院国際文化学研究科異文化研究交流センター (IReC) 主催 2011年度第2回「国際文化学のフロンティア」
2011年7月29日
神戸大学

⑧齋藤 剛
「<非境界型世界>という視座に関わる問題群」国立民族学博物館共同研究「非境界型世界の研究—中東的な人間関係のしくみ」
(研究代表者: 堀内正樹・成蹊大学・教授)
2011年1月29日
成蹊大学

⑨齋藤 剛
「人類学的バルベル研究の展開—モロッコをフィールドとした研究を主として」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所中東イスラーム研究拠点 (MEIS)
中東☆イスラーム教育セミナー
2010年9月19日
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

⑩SAITO, Tsuyoshi,
"Homelands and Home Pages: Contemporary Amazigh / Berber Identity in Southern Morocco and Beyond", (Panel Session: Peripheries Become Centers: New Media Borderlands in the Middle East), World Congress for Middle East Studies (WOCMES) Universitat Autònoma de Barcelona
Barcelona, 21 July 2010, Spain

⑪齋藤 剛
「<先住民化>という隘路を超えて—モロッコにおけるアマズイーグ運動とマドラサ復興のゆくえ」第49回神戸人類学研究会
2010年5月19日
神戸大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 剛 (SAITO, Tsuyoshi)
神戸大学大学院・国際文化学研究科・准教授
研究者番号: 00508912